

お母さんの

役割

作文コンクールの応募作品には、数多くのお母さんが登場します。

子どもたちにとっては、母親が一番身近な存在であり、影響力が大きいといえます。

子育ての参考に、昨年の入賞作品の中から、2作品を紹介します。



母ちゃんのナイス作戦

山形県・山形市立第二小学校 4年 阿部穂波

ある日の朝、登校班で集合する場所まで起きたことです。

同じ班の2年生の女の子二人が、よその家にはえているつたの葉っぱをつんで、へいにこすりつけることが何日も続きました。私は注意したかったけど、できませんでした。注意することで相手をきずつけたくなかったし、相手からの反応で自分がきずつくのもいやだったからです。心の中では、その家の人にもうしわけないと思っていました。

その家のおばさんは、冬の日の朝早く、わたしたちが登校するとき、歩きやすいように雪はきをしてくれるやさしいおばさんです。わたしは注意したいけどできないことがもど

かしくて、学校に行きたくなくなっていました。

そこで、思いきって母ちゃんに相談しました。「あそこのおばちゃん朝夕必ずはきそうじしてくれているから、悲しんでいるかもね。」と母ちゃんは言いました。

何日かたったある朝のことです。その日は、ごみの日でした。ごみぶくろを持った母ちゃんがあの二人にせまっていきました。私は、(注意してくれるのかな。でも、きずつけないでほしいな) そう思いました。

母ちゃんはごみぶくろの口を開けながら、こう言いました。

「○○ちゃんと○○ちゃん、葉っぱ落ちているね。ごみぶくろの中に入

れてくれる?」

そう言われて二人は、素直にうなずいて自分たちがちらかした葉っぱを拾いました。

「このおばちゃん、きれいすぎだからきつと葉っぱを拾ってくれて喜んでくれると思うよ。ありがとね。このこと、お母さんたちにも話しておくからね。いっぱいほめてもらってね。」そう言って母ちゃんは、ごみぶくろを持って集積場へ行っていました。

自分でちらかした葉っぱをかたづけた二人の顔は、少し反省したような、なんだかすがすがしい顔でした。

そして、母ちゃんのナイス作戦で一件落着し、この日から二人は葉っぱをいたずらしなくなりました。

言葉の使い方ひとつで相手をきずつけることもあるので、注意の仕方はむずかしいなと思います。でも、まちがったことに気づいて直した方が、その人もきつと気持ちがいいと思います。

これからわたしは、見ていないふりをしないで、あのとときの母ちゃんのように知恵を使って注意したいと思います。

それが、本当の親切だと思うからです。

運動本部より

阿部穂波さんと同じような体験をしたことが、誰にでもあるでしょう。したいことが思うようにできないもどかしさと、自分自身への落胆。そこにお母さんの「ナイス作戦」がさく裂します。阿部さんは作文に書くぐらい、ほっとしたでしょうし、お母さんに感心したことでしょう。今後、お母さんの言葉から受ける重みが増したとも言えます。

子どもに注意するとき、叱るとき、大人はよくよく考えて行動しなくてはなりません。ただ声を荒げるだけでは、癩癩としか受け取れず、真意が伝わらなくなるからです。どうすれば、子どもが真の意味を理解して、行動に反映してくれるのか。それを常日頃から頭の片隅に置いておくことが必要でしょう。

大人の世界でも、人の文句を言うばかりで自分でアイデアを出さない人は相手にされません。最近の言葉でいうと、ソリューション(解決方法)を豊富に持っている人ほど人からの信頼を得やすくなりますし、影響力も大きくなります。少なくとも子どもに対しては、ナイス作戦を披露できる親を目指したいですね。

ソリューションを持っている親をめざそう!

日常の親切

山口県・岩国市立神東小学校 6年 山村太郎

ぼくのお母さんは、いねを育てています。

ある日、お母さんは、その川に行く道の草をかっていました。ぼくが見ていると、その場所だけではなく、ずっと上の方もかっています。

「どうしてそこもかるの。」と聞くと、お母さんは、「だって太郎たちがクワガタを取りに行くときに、草がかってあった方が楽でしょ。」と言いました。

確かに、今までは草がのびていて歩きづらく、ママシもいそうでもとてもこわく思っていました。ぼくはお母さんに、草をかってほしいとお願いはしていませんでしたが、気づいてやってくれたのです。いそがしくしているのに、ちゃんとぼくたちをみてくれているんだと、うれしくなりました。

この道は、最近では田んぼを作る人が減り、みんな年をとって草かきもできなくなってきたから、あれた所が増えてきています。だから、お母さんは自分の畑の草をかるとき、とな



りの畑の草をちょっとかっただけのこととあります。草かきは大変な仕事なのに、いだけだからね。いつもよくしてもらおうね。」

「できる人がやればいんだよ。ついでだからね。いつもよくしてもらおうね。」

と言って、あまり気にしていません。このとなりの畑のおばさんがまたとてもよい人で、ちょっと草をかってただけなのに、必ずお礼を言いに来られます。そして、畑でとれた野菜や、「ぼくたちに。」と言っておいしいおかしなどをくださいます。そんなやりとりがよくあります。

運動本部より

稲穂、水田、ママシ、そして稲刈り。浮かぶ情景はのどかですが、何かと忙しい田舎の生活が感じられる作品です。山村太郎君のすごいところは、親切を快く受け止め「ありがとう」と感謝することも小さな親切であると看破している点です。もう、今からでも「小さな親切」運動本部で働いていただきたいくらいです。

小学校6年生はちょっとした分岐点です。思春期一歩手前ですから、間もなく親から受ける束縛を振り払おうとする年頃。親はその前に子どもとの関係性を確立して、反抗期に入ってもコミュニケーションが取れるようにしておく必要があります。山村君のお母さんは、自らの行動によって、大人になる方法の一つを示したと言えるでしょう。周囲への気遣い、自然への関心、日常の中での対人関係。山村君が得たヒントは、今後の人生に役立つものばかりでした。

そこで、もう一つお願いがあります。中学生になると部活動などで忙しくなりますが、時間があるとき、今度はお母さんを手伝っていっしょに草刈りしてみてください。たぶん、山村君のほうですでお母さんより力持ちだし、元気もいっぱいあるでしょう。お母さんへのありがとうは、そんな形で返すこともできますよ。

親のたったひとつの行動で、子どもはたくさんのお礼を学ぶ。

「親切」とは、見返りを求めない行いだと思います。相手の事情を察し、気持ちを考えて行う、ただそれだけのことです。そして自分が受けた親切を快く受け止め、『ありがとう』と感じやすること。これもまた親切な心だと思えます。親切な心が親切な行動となり、親切な心が広がっていく。それは、ごく当たり前の日常の中で行われていることなのだ、お母さん

のやりとりを見て気づきました。そういえば、昨日通ったあそこの道も草がかってありました。近所の人が公道のそばの草を、自らかっただけだっているのも知っています。たくさんのお礼を言おうと思います。は生きています。ふだんはなにげなく歩く道だけど、感しゃして通りたと思います。そして、今度その場に出くわしたら、「ありがとうごさいます。」とお礼を言おうと思います。